
灰色の英魂の章

『ラストクロニクル』ショートストーリー

滝 舜一

宿の外は、ひどい雨だった。

獣油のランプと暖炉から溢れ出す蜜柑色の光の中、澄んだ青い目が、じっと少年を見つめていた。

少年は我知らず、胸の鼓動が高鳴るのを感じていた。彼はまだ、エルフの女性を見たことがなかったからだ。それは、まさにこの世のものとは思えない美しさだった。ふと、秋の実りを麦畑を思わせる金色の髪がふわりと揺れて、少年の目の前の整った顔が、小さく傾げられた。桜色の唇が静かに動き、不思議な陰影を持ったやわらかい声を紡ぎ出した。

「それで……その手記を、私に読んで欲しいというのですか？」

少年は勢い込んでうなずいた。彼はまだ文字が読めなかったが、この酒屋兼宿屋——「白暁亭」を始めた亡き父が、元は貴族の出であるという話は、母親からちらりと聞いたことがあった。彼は今、どうしてもそれを確かめたかったのだ。それを証明することができれば、彼を何かと軽く扱う近隣の悪ガキどもも、自分への扱いを変えるはずだった。なんとといっても、小柄でひよろりと痩せた「白暁亭」の赤毛の小せがれが、貴族様の血を引くということになれば、これまでの

やりきれない状況を変えるには十分だ——そのために、今、この目の前の詩人の力が必要なのだった。羊皮紙に書き連ねられたその記録は、この辺境の村では珍しく、文字というものを扱える父が、忙しい店の仕事の合間に夜な夜な書き溜めていたものだった。

少年はひよんなことからその隠し場所を知っていたが（書齋を兼ねた小部屋の大机、その一番下の隠し引き出しの中だ）、父と約束をしていたから、これまで我慢していたのだ。父はそれを、「お前が文字を扱えるようになったら読めばいい」と笑って言ったのだ。「それまでは、できれば読まずにいてほしいな」と照れくさそうに笑った顔を、少年は未だに覚えている。

その父は、昨年オークの襲撃から村を守るため、戦場に立って亡くなった。少年はできることなら父との約束を守りたかったのだが、先日、幼馴染の少女の前で、村のガキ大将に自分の体格と父譲りの赤毛を馬鹿にされたことが、どうしても我慢できなかった。母親は宿と酒場の仕事で忙しく、また、彼は彼なりに男と男の約束を守りたいと思っていたから、これまでその隠し場所と父の遺稿のこと

を、母親に告げることはしなかった。けれど、もう限界だ。ここ数日、少年は夜寝床に就く時、どうしてもあの屈辱のことが頭にちらついて、よく眠ることができないでいたのだ。

これはきつと、と彼は思う。自分が大人だったなら、へらへら笑ってやり過ごせることなのかもしれない。けれど、今の僕にはそれが許せないんだ。だって、あまりに惨めじゃないか……それに、今ここでこの状況を受け入れてしまったら、きつと自分は大事なものをひとつ失ってしまう。僕はまだ大人ではないけれど、それでもはつきりと分かっているんだ……今それを失うことは、きつと永遠に失うことだと。だからこれは正当な理由があることなんだ、と彼は自分自身に強く言い聞かせた。

思えば、旅の女性詩人が、母親が経営する宿を訪れたのは、まさに天の配剤というべきものだったのかもしれない。だから彼はこの機会を逃さなかった。そしてわざわざ夜更けに彼女を呼び出し、母には内緒でその依頼を告げたのだった。もつとも、その女性がこのあたりでは珍しい、エルフ族の女性だということには、

さきほどようやく気づいた有様だったが（彼が最初、ちらりと宿に入ってくるのを見た時には、彼女はまだ雨よけの外套とフードを目深にかぶっていたのだ）。

※※※

へウメネアは今、少し驚いた面持ちで、目の前に立っている、赤毛の少年を見つめていた。痩せぎすで燃えるような赤毛を持った彼は、少し頬を上気させ、拳を固く握り締めている。それにしても、深夜にわざわざ何事かと思ってみれば……死んだ父親の手記を読んでほしい、だって？　へウメネアは、旅から旅の生活続ける吟遊詩人だ。彼女は確かに時折、訪れる村々で、文字を扱えない人々の代わりに、手紙を読んだり代筆を頼まれることがある。しかし、これはかなり珍しい種類の頼まれごとだった。

けれど、ずいぶん緊張しているらしい少年の姿を見ているうち、ふとへウメネアは気持ちがおそろふの感じていた。まるで、赤毛の子犬みたいだ……よくよ

くみれば、愛らしい顔立ちをしているようにも見える。また同時に、自分の心の中で、そつと頭をもたげてきたものも、彼女は明確に自覚していた。それ——好奇心は、自身を今の生業へと導いた要因であり、同時に他の同族たちとは明確に異なる、彼女が独自に持ち得た資質でもある。だからヘウメネアは、小さくうなずくと同時に、につこりと笑って少年に告げた。

「いいでしょう……ではその手記の束というのを、こちらに。……もちろん、お代は必要ありませんわ」

子供なりにそのことを気にしていたらしく、ほっとした様子の少年を横目に、ヘウメネアはその羊皮紙の束に目を走らせ始めた。そこに綴られているのはよく訓練された、男性のものにしては整った文字だ。夜な夜な机に向かって羽ペンを走らせる、理知的な雰囲気備えた男性の姿が、なんとなく彼女の脳裏に浮かんだ。

外の雨音は一向に止む気配を見せなかったが、ヘウメネアの心は、いつしかすつかりその奇妙な手記の中に入り込んでしまったようだった……。

ダグザとは、いったいどういう男だったのだろうか。僕に分かることは少ない。一見単純で陽気なように見えて、その実、誰にも容易に本心を明かさなない男だった。別に邪悪な意図があつてそうしていたとは思わない。今になると分かるのだが、あれは油断のできない世間というものを渡り歩くうち、誰もがいつの間にか身につけてしまふ、用心深さの一種だったのだ。

彼のことを考える時、まず真つ先に思い出すのはそのゼフィロンの田舎なまりのことだ。「どうつとこともねえ」「すまんけどちつとばかしよ、銭イ、貸してくれや」。次には、その姿が浮かんでくる。茶色く立ち枯れたケダの森のような、もじやもじやした髭。少し濁りの混じつた、薄緑の瞳。唇の左端をちよつと持ち上げ、にやりと笑う癖。耳たぶの辺りから下唇の脇まで、右の頬に長く刻まれた、古い刀傷。左足をちよつとひきずりながら、ひよこひよこ歩く独特の歩き方。よ

※※※

く使い込まれ、手入れされた二本のショートソードと、陽に焼けて色の褪せた、狐色の革鎧。誰もそれを確かめた訳ではないが、おそらく彼はバラッドの戦場で死んだ。

——鋼の時代。それは、このアトランティカが戦雲に覆われた、今より少しばかり前の時代のことだ。その頃、僕は駆け出しの傭兵で、世界や人間についてのいろんなことを、全くと喋っていいほど知らなかった。見栄えこそはいいが、あまり実用的とは言い難い両手剣を意気揚々としよつて、あちらこちらの戦場を駆けずり回っていた。

僕はグランドールとガイラントの間にある、トップル庄の田舎貴族の家に育つて、小さい頃から剣と冒険の世界に憧れた。十五の年に両親が疫病で亡くなり、まもなく家は没落したが、僕には生来呑気なところがあって、あまり気にもしなかつた。それはちよつど鋼の時代が始まりかけた頃で、僕も少しは身に覚えのあつた剣の道で身を立てようと、十九の年にある傭兵団に身を投じたのだ。

その傭兵団の名は「白晧騎士団」といった。白晧騎士団！ たぶん、グランドール出身で詩人崩れのマーカシーの発案だったのだろうが、今にして思うと、少し可笑しくなってしまう。まったく、よく付けたものだ。名前だけは立派だが、その実態は、喧嘩だけなら自信のあるならず者や、戦場で一旗上げようと考えて山師ばかりを集めたもので、ひどくお粗末な代物だった——つまりるところ、この時代にはよくある類の傭兵団だったのだ。何しろ戦場を渡り歩くわけだから人の入れ替わりは当然激しいし、報酬の分配だってあまり公平だったとは思えない。でも、いくつか良いところがあつて、そのひとつが、武器を持つて歯向かわない限り、十五より下の子供と女は襲わないし、殺さないことだった。団をまとめていた隻眼で長身のマーカシーは、若干けちな点を除けば、人の上に立つにはなかなかの資質を備えた人物だったのだ。

ダグザはそんな白晧騎士団の、古参の一人だった。この小柄な男には「錆びた投げ斧」といういささか妙な二つ名が付けられていた。この場合の投げ斧というのは、ガイラントの野猟兵が使う、柄の曲がった小さな手斧のことだ。よくしな

るアジスの若木に、薄い鉄製の刃を取り付けた武器だ。狩りや戦いで標的に投げつけて使うものだが、もし外れても、少しずつ空中で重心を移し替えながら、くるくると回転して手元に戻ってくる。

ダグザは数々の戦場に出たが、必ず生きて戻ってきた。矢傷や手傷を負うことはしよっちゅうだったが、それでも常に、その程度で済ませていた。だがその代わり、彼は華々しい手柄を立てることも決してなかった。まるで教会の古い大時計の歯車のように、彼は黙々と戦場に出て、確実に後ろ指を指されない程度の働きをし、戦笛が引き上げの合図を告げると、手近な戦利品だけを掠めて、素早く戦場から姿を消した。その二つ名である「錆びた投げ斧」というのは、つまりそういうことだ。

ダグザは上品でも尊敬すべき人物でもなかったが、その人柄には恥を恥とも思わない凶々しさにも関わず、どこか愛嬌があった。それに団長のマーカシーに何の敬称も付けず、まるで友達のように呼べるのは、彼だけだった。

僕が彼と最初に話したのは、遺跡から掘り出した貴重な宝を山と積んだ隊商の

護衛のため、ギサ近くの交易商人に雇われていた時だった。それは、確か僕がまだこの白晝騎士団に入って、半年も経たない頃だったと思う。

「なあ、新入りの兄ちゃん。ちつとばかし銭イ、貸してくれや」

とある街の市場の外れで小休止になった時、後ろからそう声がかかったのだ。振り向くと、革鎧に身を包んだ髭面の小男が、薄汚れた鞆と剣を肩に、にやにや笑いながら突っ立っていた。それが、ダグザだった。どうして僕に声がかかったのか分からず、僕はじつと彼を見た。

「えつと、そうよなあ……銀貨百枚でいいからよオ」

僕がまだなんとも答えないうちに、少しだけ遠慮がちな風を装いつつ、その男は言った。銀貨百枚は節約すれば大の男がひと月は食いつなげる、そこそこの大金だ。彼は僕に目ざとく小金を溜め込んでいそうな雰囲気を感じ取ったらしかった。もちろん、僕がまだ比較的新入りで、彼の唐突な頼みを断りにくいだろうという点も、その理由に入っていただろう。

僕はその凶々しさにかすかな不快感を感じたが、結局彼に十数枚の銀貨を手渡

すことになった。彼はそれを、露天商からガイラント特産の噛み煙草を買い貯めするための代金だと言った。あいにく、今は持ち合わせがなかったのだという。その態度はふてぶてしいわりにどこか落ち着きがなく、僕はちよつとした不信感を覚えた。やがて彼は金を受け取ると、片手をちよいと上げて恩に着るぜと言い、すぐに人ごみの中に消えてしまった。

その直後、一部始終を見ていた周囲の傭兵たちの間から、かすかな笑いの波が沸き起こった。それは何やら意味深なものだったが、彼を疑っていると取られるのも嫌だったので、僕は特別、彼らに問いかけることもしなかったのだ。だが意外にも金は、小休止が終わった直後にすぐ返ってきた。そこで男は初めて名を名乗り、ありがとな、兄ちゃん、と相変わらずにやにやししながら、僕の手には貸したのときつちり同じ枚数の銀貨を押し込んだ。

その時、そばにドリスコという陽気なドワーフの斧使いがいて、その様子を見ていた。僕がちよつとほつとした顔をしていたせいだろう、ダグザが去ったあと、彼はひとしきり笑って、こう言った。

「まあツイてたよな、やつの“噛み煙草”の調子が良くて」

その声に釣られたように、再び周囲からいつせいに笑いが起きた。意味が分からず、僕は

「調子？」

と小さく呟いた。ドリスコはまだくつくつと肩を揺らしながら、今度は片目をつぶって言う。

「ああそうさ。やつは噛み煙草は、四つ脚でぴよんぴよん跳ねるからな！」

彼はそう言つて、豪快に笑つたのだつた——あとで分かつたことだが、ダグザはその時跳び蛙の博打に凝つていて、しょっちゅう人に金を借りては、こてんぱんに負けているらしかつた。ほかに彼は、ダイスにも目がなかつた。まったく、ダグザは生まれつきの博打好きで、なおかつ偉大なる負け犬だつた。彼は博打についてはすぐに熱くなる性質で、胴元の巧みな煽りや挑発に、いちいちそれと気づかず乗せられてしまうのだ。こういう人間が賭博で長期的な利益を得ることは、闇夜に鴉を射止めるより難しいことだ。

ダグザはとにかく身持ちがだらしない男で、博打のほかは酒と女にも目がなかつた。彼がひどい二日酔いでふらふらしながら行軍についてくる姿は、とくに大きな戦いがあった後には必ずといっていいほど見受けられた。また、彼は行く先々の町で娼館に行くのを習慣にしていた。まあ、僕にも経験がないわけではないのだが、娼婦と寝るのだから、決して安くつくわけではない。何より、ダグザの娼館通いは、どこかしら度を越えたものがあつた。いつか、団にいた生真面目なイースラ渡りの青年剣士が、ダグザにたまりかねたように言ったことがある。

「ダグザさん、いい加減にしたらどうですか？ そんな金があるなら、さっさと小金を貯めて、この稼業から足を洗えるんじゃないですか？」

すると彼は髭をなでながら、河原の石ころ集めを咎められた子供のようによろこばうに答えた。

「え……だつてよお、マーカシーはうちの団にいる限り、女を襲つたらいかんというし。だつたら、銭イ使うより仕方ないだろうが」

彼は神に祈ることを知らないらしくあつた。僕が知る限り、政治や世の中のこと、

精霊神たちへの信仰のことなんかには、完全に興味がないようだった。人生に何かを求めることもなく、ただただ生きて、戦って、博打を打つ。毎日それを繰り返して、飽きないようだった。……もしくは、そのように見えた。

僕がダグザと仲を深めるきっかけになったのは、ある請負い任務で、とある龍人部族同士の小競り合いに参加した時だった。信じている教えや流れる血の違いから生まれた戦いは、激しく凄惨なものになりがちだ。けれどこの戦いは、そういったものからは無縁で、言ってみればほとんど茶番劇のようなものだった。そもそもこの争いの当事者である龍人の族長たち自身が、血を分けた兄弟という間柄だったのだ。彼らは互いに相手を威圧し、偉大な王だった父から相続した領地をめぐる問題に白黒をつけたいだけで、最後の一兵に至るまで殺し合うなんて気は毛頭なかったのだから。戦いは終始僕らのついた側が優勢に進み、賊軍（もちろん、マーカシーが言うには、報酬の支払いの悪い側のことだ）は、ついに巨大な岩山を利用して作られた、古い砦に立てこもってしまった。そうなってしまったのは、ただの傭兵である僕らには、しばらく出る幕はない。

青空の下、草原に寝転がり、上半身裸のドーフやノームの工技兵たちの手で破城槌や攻城櫓が組まれていくのを見てみると、まるで戦争をしていることなど忘れてしまうようだった。季節はもうすぐ夏で、あたりには爽やかな熱気とみずみずしい草の匂いを含んだ風がそよいでいた。ふと、薄汚れたなめし革のブーツが、視界の端に立った。僕はゆっくりと身体を起こした。ダグザだった。

「どうでえ、調子は」

調子も何も見ての通りなのだが、とにかくダグザは僕に陽気に声をかけると、隣に腰を下ろした。

「いつかは、ありがとな」

彼は律儀にも、僕に金を借りたことを覚えていたようだった。

「ああ。跳び蛙の博打だったんだってね」

「おっと」

ダグザは照れくさそうに、少し欠けた前歯を隠そうともせず、にやりと笑った。「たまたま賭場が立ってたんでよお。ま、おかげで勝たせてもらったさあ」

「そりゃ、よかった」

「うん」

ふと彼の目が、僕の身体のそばに置いてあった両手剣に止まった。

「……ふむ」

ダグザが意味深に小首をかしげた。

「何だい？」

すると彼は、こう言った。

「兄ちゃん、悪いことは言わんからよ、もつとみじけえヤツをよ、そのぶん、二本持ちなよ」

「予備の短剣なら、いつも持つてる。それに、切れ味はいいよ」

「けどよ、長過ぎら。ぜってえ、いつか命取りになるぜ」

彼はその言葉に、妙な確信を持っているようだった。確かに、当時僕の愛用していた両手剣は、取り回しが難しい代物だった。その長い刀身は、乱戦の時などには動きの妨げになることは、僕も薄々感じてはいた。

「いや……でも、これが扱いなれているし、好きなんだ」

まだ若かった僕はある種の照れ隠しで、そう答えた。するとダグザは、ふっと真面目な表情になり、ぽつりと呟いたのだった。

「兄ちゃん、なんぼ言つてもなあ、くたばったら、おしめえよ」

「……」

それから僕たちは、ぼつぼつとお互いの事を話すようになった。ダグザは表面的にはわりに多弁なほうだったが、話が自分の過去のこととなると、途端に無口になりがちだった。ゼフィロン辺境の村の生まれで、十五の年に傭兵になったことや、マーカシーとは古い戦友同士であること、白晝騎士団に入る前には、いくつかの傭兵隊を渡り歩いてきたことなどを言葉少なに語っただけだった。不思議な男だな、と僕は感じ、それから団の他の面子とは、どこか違う目で見えるような不思議な資質は、誰のうになった。だが、ダグザの中にあるように見えるそんな不思議な資質は、誰の目にもはつきりと見えるというものではないようだった。その後も彼は相変わらず、軽口を叩かれることはあっても隊の誰にも尊敬されるようなことはなかった

し、戦いで特別な働きを示すこともなかった。だが、少なくとも僕は——彼の中に、何かしらの軽んじがたいものを見出していたんじゃないか、と思う。別に自慢したいわけではないけれど、今になって、ますます強くそう思うのだ。

いつか、こんなこともあった。ゼフィロンとグランドールの国境地帯のとある街でのことだ。もともとそりが合わないこの両国は、ゼフィロンの遊撃兵がたびたび聖王国の穀倉地帯を掠めることで争いになり、両勢力ともが戦いに備えて各地から兵を募っていた。マーカシーは元詩人という経歴からグランドールに多少肩入れしていたことと、豊かな王国ならではの高額報酬に釣られて、この地にやってきた。だが戦いの直前で、グランドール側が有能な交渉者を立てた使節を出したことでかりそめの和睦が成立し、仕事はフィになった。

マーカシーが、せめて旅費だけでも補填してくれないかとグランドール側と交渉している間、僕らはしばらく、この国境地帯の街で時間を潰すことになったのだ。久しぶりに訪れた平穏に、街の外れにはさっそく市場が立つことになった。野菜や果物、日用品なんかを売る露店に紛れて、僕は古書を扱う商人の露店を覗

いてみたのだ。

僕の目当ては、古人の書き記した旅行記や冒険記だったが、暇つぶしということで僕と連れ立っていたダグザは、終始退屈そうにしていた。彼は文字は多少読めたが、地図上に書かれた地名を読み取るにも少々手間取る有様で、字や本というものを死体の上をのたくる這い虫のごとく毛嫌いしていたからだ。ちなみに、彼が字を書けないことも僕は知っていた。いつか辺境の酒場で、つけのサインを求められた彼は、酔ったふりをして僕に代筆を頼んだからだ。あの時の少々決まり悪げな顔を思い出すたびに、僕はふとおかしくなってしまったものだった。

僕が本の山にうもれていた古い博物誌を見つけ、手にとって眺めていた時、ふとダグザが何気ない様子で尋ねてきた。

「これ、なんの本だ？」

さつきも説明したとおり、彼は本なんて、焚き火を起こす時にくすぶり始めた小枝の後にくべるものだと考えているような人種だったので、僕は少々驚いて、彼の顔を見た。すると慌てたように、ダグザはぼそぼそと言うのだ。

「いやさ、なんかよ、ガキの頃に見たことがあるような気がしてな……」

僕は思わず彼の手にしている本に目をやった。それは物好きな民話学者が、ゼフィロンのとある山岳地帯の伝承を集めてまとめたものだった。

彼が開いているページには、ゼフィロンのスワント族独特の衣装をまとった少女と、冴えない羊飼いの姿が描かれていた。それは、盲目の翼人の少女と醜い羊飼いの男の恋物語だ。有名な話でもあり、僕も小さい頃に読んだことがあった。それは哀愁漂う叙情的な話ではあるが、同時に少々凡庸な型にはまった民話でもあった。幼い頃のことでもあり、僕は確かに感銘を受けたものの、内容自体はすでに忘れてしまっていたほどだ。

だがダグザは、本の内容を説明する僕の方をろくに見もせず、古びて色あせたそのページをじつと見つめていた。それは妙に真剣な表情で、どこかしら人をはつとさせるところがあった。その後、驚いたことに、彼は懐から銀貨を取り出し、古書商に支払ったのだ。

「ただの気まぐれだよ」

そう彼は言つて、鼻の下をそつと擦り上げた。その夜のことだ。逗留していた安宿で、虫に刺されて寝付けなかつた僕は、夜中に用を足すためにベッドから出た。宿の中は寝静まっていたが、なぜか広間から、暖炉で火の爆ぜる乾いた音が聞こえてきた。不思議に思つて広間をのぞくと、古びた椅子の上に、誰かが腰掛けていた。ダグザだった。彼の手には、昼間のあの本があった。すぐに読めないのがもどかしいらしく、彼は必死でページを追っている様子だった。暖炉から溢れ出す黄金色の光が、不意にダグザの表情を明るく照らし出した。僕はその横顔を見た——目元の古い刀傷の上の辺り。目尻が、かすかに熟れたリンゴのように赤くなつていたのだ。

でも、それはほんの一瞬だった。僕の姿に気づくと、ダグザははっとしたように顔を伏せた。

「何だ、起きてたのかい？」

「まあね」

「いや、ちよつと煙が目染みちまつてよオ……」

ご丁寧にも節くれだった拳でごしごし目元をこするふりまでして見せながら、彼はそう言った。元より僕は詮索する気もなかったのだが、どちらにしてもこんな夜更けまで起きていた理由にはなるまい。僕はちよつとしたおかしさを感じながらも、どこか新鮮な驚きに打たれていた。だってそうだろう？ 世の中には、子供だましの古い恋物語に、戦場を這いずり回ってきた古参の傭兵が心を動かされるなんてことが、本当にあるものらしいのだ。

それ以来、僕はこの男にさらに興味を抱くようになり、折を見て彼と話すようになった。彼もまんざらではないらしくかった。相変わらずあまり自分の話はしない男だったが、戦場をめぐる生活の合間に、それなりに気を許せる話相手がいるのは悪いものではない。そういう感覚は、僕にももちろんあった。傭兵という存在には多くが身寄りを持たず、またその過酷な生業ゆえに、いつこの世界を去ることになってもおかしくない存在なのだから。

※※※

そんな風にして、僕がダグザと会ってから数年が過ぎた。その間に僕たちの傭兵団は三つの戦争に参加し、無数の小競り合いと依頼を請け負った。僕がその間に稼いだ少なくともはない報酬は、すべて宝石と金塊に変えられ、秘密裏にジャケツトの裏地に縫い込まれていった。

そしてある夏——バラッドの戦いが訪れた。それはバストリアの戦士たちの侵入に悩まされるグランドールの国境地帯で行なわれた戦いだった。そして、マーカシーが珍しく後日何度か愚痴ったように、白晝騎士団が手をつけた中ではもつとも分が悪い、まさに「鎖鎧に泥を浴びる」類の仕事だった。

バラッドは、バストリアとグランドールの国境地帯にある大森林地帯だ。そこに着くまでに数週間かかり、短い夏の間、数度の小競り合いと奇襲があった。押せば引き、引けば押し返してくる戦術の巧さもさることながら、僕たちをもつとも悩ませたのは、黒い戦狼にまたがった狂戦士たちの度重なる襲撃だった。国境地帯の森は深く広く、母親の懐のように、バストリアの戦士たちを覆い隠す。

やがて十日ばかりが過ぎた頃には、僕たちは巨人に踏みつけられたボロ人形のようになり、すっかり疲れきっていた。バストリア兵の奇襲は、日に数度続く時もある。二日に一度あるかないかの時もある。低くドロドロと轟く、狂戦士たちの戦いの雄叫び。独特の彩の羽を持ち、鋭く空を咲くオークたちの毒矢の唸り。それらを耳にするたび、焼け付くような無残な死の予感が、心を掠める。どんなに硬い岩も風雪にさらされれば、やがて削り取られひび割れてしまうように、繰り返される戦闘の緊張と重圧は、どんな強靱な精神も、少しずつ疲弊させてしまう。りんごの皮を薄刃のナイフで剥いていくかのように、魂の芯に染み込んでいく恐怖は、たやすく心の繊細な形を浮き彫りにする。

純血主義のグランドールは、バストリア兵との小競り合いによる直属軍の消耗を避けようと考えたらしく、珍しく僕たちのほかにいくつかの傭兵隊を雇っていた。だがそれらのうちいくつかは、意外に少量の死者と驚く程大量の脱走者を出して、壊滅状態に追い込まれた。グランドールから与えられる報酬、仲間の命、己の人望と身の安全。いくつかの要素を素早く天秤にかけたマーカシーは、すぐ

に基本方針を固めた。何といつても彼は、毒蛇とならず者の喧嘩は遠くから眺める、が口癖の男だったのだ。そんなわけで、僕らは監視役として同行していたグランドール騎士様をうまく説得し、辺境とグランドールの支配圏を隔てる境界線、赤河のほとりまで引き返してきたのだった。

赤河は上流の山岳地帯から流れ下ってくる鉄分まじりの泥水をたたえる、そこそこの大河だ。そこには粗末な木の橋がかかっており、それが唯一の河を渡るすべだった。マーカシーとしてはすぐに橋を渡り、向こう岸から安全に橋を落とすたかったのだが、例の監視役のグランドール騎士殿が、頑固にそれを拒絶した。橋はこれでもグランドールの聖なる建築物にあたり、聖王様や教皇様の許可なしで勝手にそれを落とすわけにはいかない、というのが彼の言い分だった。また、後に勝機を掴んだ時、橋を落としてしまうとこちらが押し返すのに困るとも。

まったく、やれやれだった！ 仮にこの戦いに勝機があったとして、僕らの首がその頃、胴体から切り離されてバストリアの暗黒司祭たちの祭壇に掲げられていないという保証はどこにもないのだが！ 僕らは彼の石頭にうんざりしていた

が、傭兵というのはこういう時には立場が弱いものだ。

そんなわけで、僕らは仮の野営地を築き終わると、橋を落とす準備だけを先に進めて、その実行は、騎士殿が判断する「来るべき時」まで待つことになった。時刻はすでに夕暮れで、太陽は、どこまでも続く黒い森の果てに、最後の残光を投げかけつつ、そつと消えていこうとしていた。

幸いバストリア兵の襲撃はなく、ほどなく作業は終わった。橋はまるで寺院の尖塔に吊るされた鐘のように、いまや数箇所につながれた大縄でのみ、その重みを支えられている状態だった。それらを切れば、ごうごうと音を立てて流れが逆巻く河底に、すべてが落下する仕組みだ。全ての作業が終わる頃にはあたりはすっかり暗くなり、たいまつに灯されたかがり火が、僕らの頬を照らしていた。

そんな時だ。見張りをしていた者が伝令を送ってきて、バストリアの斥候らしき一団と出会ったことを告げてきた。彼らは軽装の偵察部隊で、ある程度戦うとすぐに森の中に退却してしまったという。マーカシーは低く唸った。斥候が出ているということは、大部隊がすぐ近くまで迫っている可能性が高いということだ

からだ。野営地は一気に慌ただしくなった。

洩るグランドールの騎士殿をほとんど脅迫じみた方法で説得し、ようやく橋を落とす許可を取り付けた時……闇を切り裂いて、赤い炎の糸が数本走り抜けた。それは近くの森から射かけられた火矢だった。鋭い音とともに空を裂きながら飛来すると、それらは野営地のあちこちに突き立って、草を焼き始める。煙が立つ中、慌てて火を消した僕らは、そのまま円陣を組んでバストリアの襲撃に備えた。だが、こちらの守りが固いと知るや、彼らはそれ以上の襲撃をいったん思いとどまったようだった。しかし準備が整い次第、新たな襲撃が仕掛けられるであろうことは明白な事実だった。

事ここに至り、マーカシーの決断は素早かったが、狭い橋の上を渡って向こう岸に撤退するためには、ある程度の秩序だった動きが必要だった。また、無事に渡りきったとしても、橋を落とさなければ敵の追撃は緩まらない。バストリアの狂戦士たちが駆る黒い戦狼は、ずば抜けて足が速い上に、いつでも血に飢えているのだ。だが、橋を落とすということになると、ひとつ問題があった。向こう岸

で橋を支える大綱はともかくとして、こちら側から橋を支えている大綱とその足場をどうするか、ということだ。

答えは誰もが分かっていた——誰かが橋げたの下か付近の森に潜む。そして、みんなが渡りきった後に、頃合を見てそれらを破壊するのだ。だが、これがとても危険な任務であることは明白だった。なにしろ、敵に橋を渡らせないために、自分の手で唯一の退路である橋を落とすことになるのだから。それは高い確率で、バストリアの戦士たちの群れの中に取り残されることを意味する。

この地方独特の青みがかかった突きが、冷ややかに森の中を照らしていた。円陣を一旦解除し、広場に集められた一同にマーカシーから手早く状況説明があった。そして、あたりに沈黙が降りた。

「誰か、いないか」

誰からも返事はない。僕らはそれぞれが、腹巻やジャケットの裏地や下着に仕込んだ自分の財産のことを考えていた。焼けた鉄板の上で炙られるような、じりじりした気詰まりな時間……その時だ。

ひよこひよここと左足を引きずるようにして、誰かが前に出た。ダグザだった。周囲は一瞬静まり返った。彼がいつでも、戦場では生き延びることを第一にしてきたことを、みんな知っていたからだ。

「ちよつとな、足をやられた。だからもうさ、この稼業も無理だからよ」

彼はちよつぷり苦笑してみせると、静かにそう言った。僕はその言葉に、思わず彼の足を見た。だがそれを引きずっているのはいつもの癖だし、どこにも怪我をしているようには見えなかった。マーカシーは、ダグザの皺と髭だらけの顔をじっと見つめた。やがて彼は頭を垂れ、ぽつりと一言だけ言った。

「すまん、頼む」

後にも先にも、自惚れ屋で本質的に傲慢なところがあるマーカシーが、本気で誰かに頭を下げていると感じられたのは、その時だけだ。ダグザは軽くうなずいただけだった。僕は黙って考えていた……彼にかけるべき言葉を。

「なあ、ダグザ」

「ん」

「賭けをしないか」

「賭け？」

「もしあんたが帰ってきたら、僕の持ち金の十分の一、あんたにやるよ」

僕の声は、ちよつとかすれていたと思う。ダグザはそつと誰かが差し出した煙草に火を点け、ぼかつと煙を吐き出すと

「おもしれえな」

とだけ答えた。彼はまるで春の牧場の老牛のような、穏やかな目をしていた。

「で、もし俺が……戻つてこなかったら？」

間があった。

「……笑つてやる、みんなで。根性なしつて」

ダグザはにやりと笑つた。

「それじゃ、賭けにならんやな。どつちに転んでもおめえの得にはなんねえ。

……ほれ」

ダグザは言いながら、右手を差し出した。そこに握られていたのは、彼愛用の

ふた振りのショートソードのうちの一本だった。

「これが俺の賭け札だ。俺が負けたら、好きにしろや」

ダグザはしばらくして小さく言った。

「ありがとよ。世話んなったな」

僕はさつきからずっと感じていた疑問を、口に出すかどうかためらっていた。

だが最後には決心し、まっすぐにそれを彼に投げかけた。

「……でもさ、どうしてあんたが？」

「どうしてって……」

ダグザはそつと人差し指で頬を掻いた。

「まあそりゃ、いろいろとな……」

彼はなかなか話し出さなかったが、待ち受けている運命へのぼんやりした予感
は、やはりどこか人を素直にするようだった。

「俺がひよつこだった時によ、やつぱり小さい傭兵団にいたんだ。その時よ、敵
に夜襲を食らっちゃってな。俺らは河べりに追い詰められた……仲間が何人もや

られちまつてよオ……」

ダグザは一度ふう、と息をついて、ぼそぼそと続けた。

「そんな時、俺が見張り役でよ……なのに、酒エかつくらった拳句、うつかり眠りこけちまつてたのさ。気づいた時にゃ、敵に火イかけられて、あたり一面真っ赤だった。んで、河の一本だけの橋を渡るにゃ、誰かがしんがりで残らなきやいけなかつたんだ」

「……」

僕は黙って、珍しく饒舌な彼の話に耳を傾けていた。

「したらよ、いつもトロくさい俺を怒鳴りつけてた隊長の野郎が言ったんだ。俺の横つ面を一発、思いつきしぶん殴ってからな。俺が残る、とさ。そんな時、おりゃびつくりしたよ……すげえな、と思った。夜襲食らっちゃったんは、俺の落ち度だ。何となく、しんがりしよわされてもしかろうがねえと思つてたからよ……隊長つてえのは、なんちゅうか、偉えもんだと思つたよ」

ダグザは時折、目をしばたかかせながら話した。

「でよ、やつぱり隊長は駄目だった……」

そう言つて軽く目を閉じる彼を、僕はじつと見つめていた。

「おりゃあよ、今までとにかく、生き延びることだけ大事にしてきたんだ。でもそれは、でっかい夢だとか野心のためだとか、そういうんじゃないのさ。何となくだ……ただ何となく、おつ死ぬことから逃げてたんだな。ヘンな話だが、自分でも不思議だったんだぜ」

彼はここまで言うのと、ゆっくりと髭を撫でた。

「でもなあ、マーカシーが誰かいねえか、つて言つた時な、ドキツとした。同じなんだ。あの時と、同じなんだよな。……つまり、そういうことよ」

ダグザは再びそつと目を閉じた。どこかしら、自分の少ない語彙の中から、その気持ちにぴたりと寄り添う言葉を探すのに苦労しているようだった。

「何かやつぱりよ、でっかい借りからは逃げられねえもんなんだ。あるんだよな、何かこう、どでかいものに縛られるつてことが。でよ、その縛られてるもんからは、逃げられねえし逃げちゃならねえ……そうだな、借りはいつかは返さなき

やならないもん”なんだよ、たぶん」

ダグザはまるで自分に言い聞かせるかのようにそう言って、話を結んだ。

「……なあ」

僕は少し黙っていたが、ようやく口に出す。

「何か、僕にできることは？」

「別にねえやな」

と、笑いかけたダグザは、ふと思い直したように言った。

「いやそうだなあ、ちょうど銀貨百枚でいいや。カラリアの街の月影亭って安酒場のさ、ミリイって女にさ、俺が借りてた銭イ、折りみて返しといてくれや」

少し照れたように笑う彼に、僕はうなづいた。僕の後、何人かが彼に声をかけた。ダグザはその全員と言葉を交わすと、やがてひとり、森の中へと消えた。

まもなく、木々の間から最初のバストリアの黒狼が現れた。誰かの腕がかじり取られ、また誰かの剣の一撃が、牙を剥いたその首を両断した。その背にまたがついていた狂戦士は無様に転げ落ち、すぐに心臓に刃を突き入れられて止めをささ

れた。だが間髪入れず、森からは次の黒狼が湧き出してくる。後から後から、ひっきりなしの攻撃を防ぎながら、僕たちはじりじりと橋を渡り始めた……。

そして最後にひとりが橋を渡り終えた直後、マーカシーが大声で叫んだ。

「やれ！」

その声に答え、誰かが火矢を真つ暗な夜空に射ち放った。それはまるで花火のように、夜空に赤い炎の軌跡を描き、やがて中空で弾けた。そして、まもなくその合図に答えるように縄が切られ——橋は落ちた。バストリアの戦狼が何匹か、その背の狂戦士たちごと橋げたの落下に巻き込まれ、ものすごい叫びを上げて、赤河の流れに飲み込まれていった。それと同時に、渦巻く流れの向こうでもしぶきの音が上がった。バストリア兵たちの怒号と悲鳴が、急流のごうごうという轟きに紛れて、かすかに聞こえてきた。

やがて物音は止み、あたりには赤河の激しい水音だけが残った。僕らはみな、無言だった。疲れきった顔で、赤河にほど近いグランドールの辺境都市に向かって歩き出したのだった——。

戦いのことだけで言うと、結局バラッドの戦いで、グランドールは辛うじて勝利を収めた。バストリアの戦士たちが赤河を渡るのを手間取っている間に、増援の白エルフの弓兵たちが到着し、彼らを河畔で迎え撃つことができたのだ。

戦いが終わった後、僕らは一時の拠点となっていた辺境都市の広場に集められた。報酬は申し訳程度だった。お目付け役の騎士殿は、僕らの撤退の顛末を、しっかりと彼の上官たちに報告したのだ。グランドールの前線指揮官だというアガトーという聖騎士は、磨き上げた白銀の鎧を着込み、声高に勝利の喜びを語った。広場の急ごしらえの演壇に敷かれた赤い絨毯の上で、彼の声は朗々と響き渡った。だが、彼の演説の間、僕は帰ってこなかったダグザのことを考えていた。

半年後、ゼフィロンの国境にほど近いカラリアの月影亭で、僕はミリイという商売女に会った。確かに割と美人だったが、どこか野暮ったさの抜けない女だった。ダグザの甲意報酬の一部を渡した時、彼女は驚いて、馬鹿正直にも自分も誰にもそんな大金など貸した覚えはないと言った。改めて彼女に話を聞くと、実のところ、ミリイはダグザのことをあまりよく覚えていなかった。ただ一度だけ、

言葉のなまりがきつかけで、互いの故郷が同じだということが分かり、盛り上がったということだった。

ダグザの存在が隊にとつて、どれほどのものだったのかは分からない。何しろ彼のあだ名は「錆びた投げ斧」だったのだから。でもバラッドの戦い以降、確かに何かが少し変わってしまったと思う。たぶん、隊の雰囲気が変わったというより、僕の内面が変化してしまったのだ。それは緩やかだが確実なもので、変化が起きていることを分かつてはいても、たぶん本人にはどうしようもない種類のものであった。

僕はその後、大切な人ができて、傭兵稼業から足を洗った。それから故郷にほど近い街に戻り、小さな酒場を開いた。ダグザのことは、忙しい日々の合間に、ふと考えることがあった。

正直なところ、僕には未だに分からないのだ。それは例えば、火事場の中に無我夢中で飛び込んで、取り残された赤ん坊を助けるのとはまったく違った種類のものだ。ほの暗い運命の予感と、確実に冷徹な出来事。それを冷ややかで静かな

心をもって眺めた上で、すべてを知っていて、奈落の中に歩を進めるのだ。

僕が分かっているのはたったひとつだ。ダグザは決して英雄気質の人間などではなかったし、あらゆる意味で立派な男でもなかった。たぶん最後まで神に祈ったことはなかっただろうし、酒癖が悪く博打狂いで、誰かに本気で愛を囁いたことなど、あったかどうかも疑わしい。

彼のことを考える時、僕は凡庸で卑小なものと、大きくて美しいものの間にある違いのことを考える。明るい夜の庭を照らすのが、月の光なのか星のそれなのかを区別することが難しいように、僕には時々、本当によく分からなくなる。考えているうちにやがて、もしかしたら両者の間には、あまり大きな違いはないのではないかという気がしてくるのだ。少なくとも、あの広場で勝利の演説を行なったグランドールの聖騎士が着ていた白銀鎧と、ダグザのくたびれた狐色の革鎧を見比べて、質屋が値踏みしそうな硬貨の枚数の差ほどには。

※※※

いつの間にか、暖炉の灯りが弱まり始めていた。夜更けの雨は、いつしか止んでいたようだった。ヘウメネアはその羊皮紙の束に目を通し終えると、しばらく目を閉じ、じつと無言で考え込んでいた。彼女の脳裏には今、誰にも知られることのない無名の英雄譚が浮かび上がり、言葉の群れとともに生まれ出ようとしていた。それは世間でよく謳われるものとは、少し異なった形と輝きを持っている。それをまだ幼い少年にどういう形で告げるべきか、美しいエルフの吟遊詩人は、最大の繊細さと注意を払って言葉を選んでいった。やがて彼女は心の中の無数の言葉の群れの中から、ようやく語り出しに一番ふさわしいと思われるそれを、そつとたぐり寄せた……。